

蒲郡と万葉集

安礼の崎はどこにあるのか

風光明媚な地として知られる蒲郡は、開発の祖である藤原俊成卿が中世を代表する歌人であったことから、短歌と関わりが深いことで知られています。実は千二百年以上に編まれた万葉集の作品とも関わりがあると言われています。それは、蒲郡が面する三河湾に、奈良の都と三河国の国府とを結ぶ海上交通のルートがあったからです。

万葉集巻一より

いづくにか船泊てすらむ安礼の崎

漕ぎ廻み行きし棚無し小舟

高市連黒人

(今ごろ、どこで船泊りをしているのだろう。)

先ほど安礼の崎を漕ぎめぐって行った棚無し小舟は。)

この歌は、まさに三河湾で詠まれたものですが、ここに登場する「安礼の崎」の所在地をめぐって、古来万葉学者の間でさまざまな諸説が唱えられてきたことは、よく知られています。

今号では、この安礼の崎の所在地をめぐる諸説についてご紹介をします。

写真：西浦半島から眺める三河湾

万葉集と愛知

万葉集は、7世紀後半から8世紀後半にかけて編まれた現存する日本最古の歌集です。全20巻からなり、約4千5百首の歌が収められています。この中には、愛知県内で詠まれた歌もいくつかあります。しかし、現存するものは、すべて写本で、万葉集の編纂、成立の経緯については、詳しくは分かっています。

次の一首は、愛知県に最も関わりの深い歌として知られています。

桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟

潮干にけらし鶴鳴き渡る

高市連黒人

(万葉集巻三)

(桜田の方へ鶴が鳴きながら飛び渡って行く。年魚市潟では潮が引いたらしい。鶴が鳴きながら飛び渡って行く。)

「年魚市潟」は現在の名古屋市南区笠寺一带と推測されています。「あゆち」が「あいち」に転じ、県名「愛知(あいち)」の語源となつたと言われています。

持統天皇の「三河行幸」と高市連黒人

平安時代初期に編纂された『続日本紀』に持統天皇の三河国への行幸が記されています。

これらの記述などをもとに推測すると、持統天皇の一行は大宝2年(702年)10月10日に藤原宮を出発。伊勢国の円方付近(三重県松阪市東黒部町)から船出し、伊良湖水道を渡って三河湾へと船を進め、終着地の三河国府をめざすとされます。

この三河行幸は約2カ月かけて行われました。しかし、旅の疲れもあったのか、持統天皇は、行幸の翌月に崩御。旅好きでもあった持統天皇の最後の行幸となりました。

この行幸に加わっていたのが宮廷歌人・高市連黒人。高市連黒人は、万葉時代の黄金期を築いた歌人の一人として数えられ、三河や尾張のほか、吉野、山城など旅先で詠んだ歌を多く残しました。その歌が万葉集に記されています。